

# 「千字文―和―」作品制作について

土橋靖子

Yasuko Tsuchihashi

日頃より私は、変体仮名を含む仮名の根源を探り、さらに仮名表現を深め、また脈々とつながる書文化の今日的表現としての和文を書く上において、常に漢字の古典にふれることは不可欠と信じ、私なりに肅々と学び続けて行きたいと思っている。その一環として、この度、「千字文―和―」と題し、仮名の世界を意識した漢字作品制作を試みた。

千字文は、古来多くの能書家が書き、集字によるテキストも数々見ることができ、それらの様々な古典に寄りつつ、日本的な風土に合う漢字表現を千字文に載せるべく模索した。

今回は、あえて、いわゆる和様漢字には近づかなかった。書道史的な括りを見るに、ある種の脆弱性を感じているからだ。

以下、根底とした主な古典とそれに対する私なりの受け止め方を記してみる。

懷素 草書千字文

千金帖ともいわれるほど、味わい深く、格調も伴い、力みのない書風で、和の風趣に通じやすく、ムードをもらった。ただ懐狭く、姑息にならないよう注意すべきと感じる。

智永 真草千字文

楷書と行・草書が一見して比較参考出来、学びやすく基礎となったが、風趣乏しく息苦しさが否めない。所謂教科書的。味わい、抜きが欲しいと感じる。

傅山 千字文

達者、リズムカル、連綿の見事さよ。気脈の繋げ方は目習いにおいて大変参考になった。が、連綿の美を求める仮名にはむしろ単体の骨のある漢字が欲しい。また日本の「侘びさび」とも遠いと感じる。

王羲之 行書千字文（集字）

まさに骨子そのもの。格調高きも真面目すぎてない。特徴である文字上部の大らかさをしっかり学ぶことに努めた。しかし時折素っ頓狂なまでの結体を見せる。とても近寄りたいたいと感じる時がある。

米芾 行書千字文（集字）

王羲之風の通訳的存在の書風と捉えた。ただ背勢がきついと風趣から遠ざかる。気取りにも通じてしまう。素朴と対局。背勢の形をほぐし、のどかな気分で捉まえようとした。

王鐸 行書千字文（集字）

気、骨、鋭い。油性のイメージ。その点は最も「和」から距離があると感じた。ただ筆運び、行書としての心地よい崩し方が魅力的。その点を参考にした。

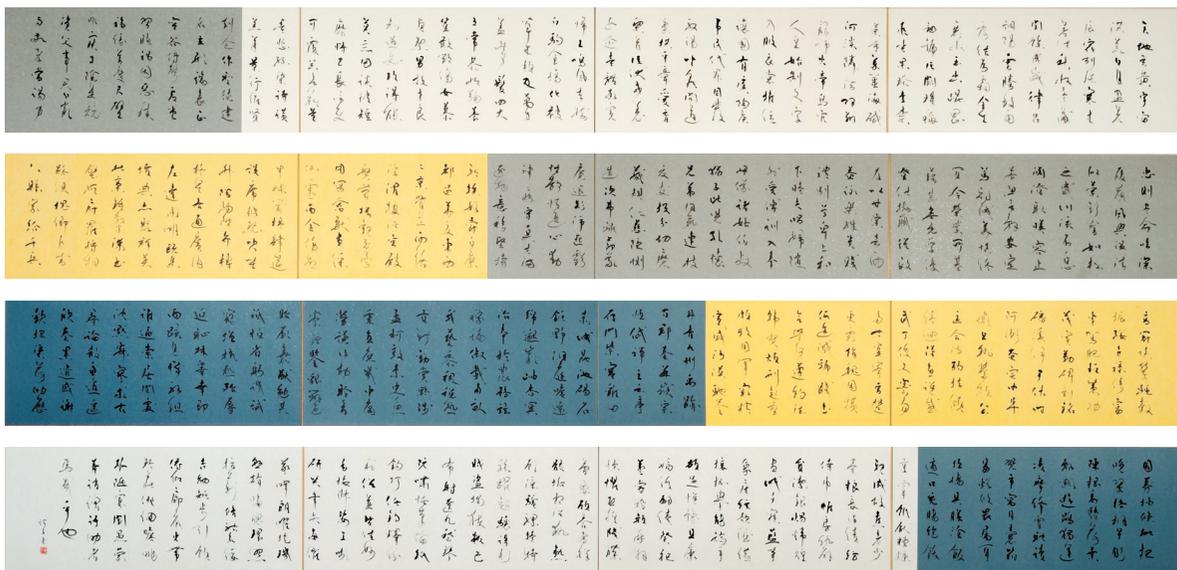
これらの古典に寄りつつ、さらに留意したことは、文字の右肩を下げることである。仮名は、下へ下へと連綿されてゆく。その習性からか、古筆に右肩上がりはあまり認められない。それゆえ和の風趣を醸し出すために、空気を下へ抱え込むような結体を心掛けた。

章法においては、行のシルエットを特に意識した。これは仮名作

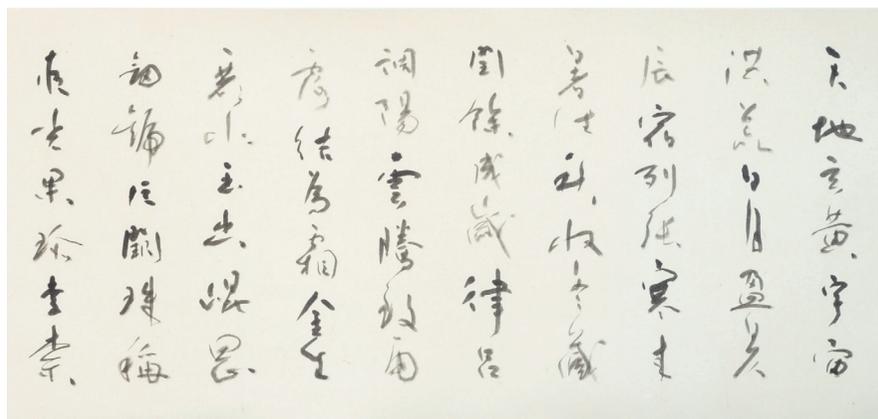
品制作と同じと痛感する。

今後はさらに研鑽を深め、自らの世界観を広げ、それを書に表わすことが出来るよう努力していきたい。

前述の通り、本作は古典・古筆に立脚した和文の書、すなわち日本の書の世界を求めていく為の布石と位置付けている。つまり、今の私の一つの姿勢である。これからさらに精進を重ね、世界観を広げ、またあらたな千字文を発表できればと思っている。



29 × 262cm × 4



(部分扩大)

【积文】

天地玄黄 宇宙洪荒  
 日月盈昃 辰宿列张  
 寒來暑往 秋收冬藏  
 閏餘成歲 律呂調陽  
 雲騰致雨 露結為霜  
 金生麗水 玉出崑岡  
 劍號巨闕 珠稱夜光  
 果珍李柰

(以下略)